

あじさいの小道

この寒空の時期誰もこのあじさい園に覗き込むものはいない。
たまたまカラスウリの実がなっているか確認に行き、その
足で、あじさいの咲く小道に寄ってみた。
不思議な感覚になった。静寂の中にあじさいはまだ残っていた。
色はだいぶ色褪せ、渋い色合いである。
どこかドライフラワーのようである。
最盛期の華やかさと違って、別の感覚がする。
何か感動を与えてくれる。
ひっそりと枯れ行く中で、まだまだ美しさを秘めている。
それは何なのか。
共感する哀れさだろうか。
花期の終焉はどの花にもある。
それを受け入れながら、時を待つ。
木枯らしが吹き、冬将軍が襲ってくる。
じっと耐えながら、終焉の時を待つ。
植物は8°C以下になると成長が止まり、
5°C以下になると休眠状態に入る。
そして春を待つ。
春になれば新芽が出る。
これが植物にとっての再生であり、復活である。
この小道を通して考えさせられた一コマである。